

詩篇23篇 ダビデの賛歌

- 1 主は私の羊飼い。
私は、乏しいことはありません。
- 2 主は私を緑の牧場に伏させ、
いこいの水のほとりに伴われます。
- 3 主は私のたましいを生き返らせ、
御名(みな)のために、私を義の道に導かれます。
- 4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、
私はわざわざいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖、
それが私の慰めです。
- 5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、
私の頭に油をそそいでくださいます。
私の杯は、あふれています。
- 6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと
恵みとが、私を追って来るでしょう。
私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

この詩篇23篇は、聖書の中でも、最も愛され、暗誦されている個所だろうと思います。
ある人は、この詩篇23篇を、「詩篇の真珠」と呼びました。
美しく、主なる神さまへの信頼を歌っています。その思想の美しさは、絶品です。
その美しさも、単なる比喩的な表現や、牧歌的な表現の巧みさからというのではなく、詩人ダビデの、信仰経験の深さと豊かさによるもののようです。

聖書は、あちこちで、主なる神を「羊飼い」、私たち神の民を「羊」として、その関係を表しています。
「主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民。その御手(みて)の羊である。」
「きょうのこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神。」
「神は、ご自分の民を、羊の群れのように連れ出し、家畜の群れのように、荒野の中を連れて行かれた。彼らを安らかに導かれたので、彼らは恐れなかった。」

羊飼いであられる神。その羊である私たち。
私たちの主イエス・キリストご自身も、ご自分のことを、「よい牧者・よい羊飼いである。」と、おっしゃいました。
「わたしは、良い牧者です。良い牧者は、羊のために、いのちを捨てます。わたしは、良い牧者です。わたしは、わたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。わたしは、羊のために、わたしのいのちを捨てます。」

主イエス・キリストを「羊飼い」として、美しくえがき上げた絵や美術作品は、数多くありますし、皆さんもご覧になったことがありだろうと思います。

「主は、羊飼いのように、その群れを飼い、御腕(みうで)に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる

羊を、優しく導かれます。」

「まことに、神である主は、こう仰せられる。

見よ。わたしは、自分で、わたしの羊を捜し出し、これの世話をする。牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中にいて、その群れの世話をするように、わたしは、わたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。

わたしは、国々の民の中から、彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や、谷川のほとり、又、その国のうちの人の住むすべての所で、彼らを養う。わたしは、良い牧場(まきば)で彼らを養い、イスラエルの高い山々が、彼らのおりとなる。彼らは、その良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で、草を食(は)む。

わたしが、わたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。—神である主の御告げ(みつげ)—

あなたがたは、わたしの羊。わたしの牧場の羊である。

あなたがたは人で、わたしは、あなたがたの神である。」

詩篇23篇の冒頭で、注意したいと思いますのは、「主は私の羊飼い」といっていることです。「私の羊飼い」「私たちの羊飼い」とは、いっていません。全般的な、「私たち神の民、救われた者たち」ということではなくて、「主は、私個人の羊飼いである。」と表明しています。

この詩篇23篇をざっと見て、目につくことばがあります。

「主、あるいは、あなた」ということばと、「私」ということばです。

一番はじめと、一番終わりに、「主」ということばが出て来ます。

1節「主は私の羊飼い。」

6節「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」

そして、この、はじめと終わりの「主」ということばの間に、「私」ということばが、散りばめられています。

一番多く出てくるのは、「私」ということばです。15回も出て来ます。

「私の羊飼い」「私は乏しいことはありません」「私を緑の牧場に伏させ」「私のたましいを生き返らせ」

「私を義の道に導かれます」「私はわざわいを恐れません」「私とともにおられますから」

「私の慰めです」「私の敵の前で」「私のために食事をととのえ」「私の頭に油をそそいでくださいます」

「私の杯は、あふれています」「私のいのちの日の限り」「私を追ってくるでしょう」「私は、いつまでも、

主の家に住まいましょう」

私、私、私、私、私 ……………と、15回も、くり返されています。

「私」の次に目に入ってくるのは、「主」あるいは、それよりももっと親密なことばである、「あなた」ということばです。「主」は4回。「あなた」も4回。合計8回も出て来ます。

「主は私の羊飼い」「主は私を緑の牧場に伏させ」「主は私のたましいを生き返らせ」

「主の家に住まいましょう」「あなたが私とともにおられます」「あなたのむちとあなたの杖」

「あなたは私のために、食事をととのえてくださいます」

「私は最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」とおっしゃった「主」が、この詩の最初と最後におかれ、その主の御名(みな)に囲まれるようにして、「主」という光の中に、「私」が、きらきら、きらきら……と、きらめいているように見えます。

冒頭で、「主は私の羊飼い。私個人の羊飼いである。」

と、信仰告白したわけですが、もう少し、具体的に、「羊飼い」である「主」の側のことと、「羊」である「私」の側のことを、分けて見ていきましょう。

「羊飼い」である「主」は、どうだといっているでしょうか。8つのことが、記されています。

- ① 主は、私を緑の牧場に伏させます。
- ② 主は、いこいの水のほとりに伴われます。
- ③ 主は、私のたましいを生き返らせます。
- ④ 主は、御名のために、私を義の道に導かれます。
- ⑤ 主は、私とともにおられます。
- ⑥ 主は、むちと杖で、守り導かれます。
- ⑦ 主は、敵の前で、食事をととのえてくださいます。
- ⑧ 主は、私の頭に、油をそそいでくださいます。

一方、「羊」である「私」の方は、どうでしょうか。5つのことが、記されています。

- (1) 私は、乏しいことはありません。
- (2) たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、わざわいを恐れません。
- (3) 私は、慰められます。
- (4) 私の杯は、あふれています。
- (5) 私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来ます。

そして、“決意”として、

「私は、いつまでも、主の家に住みます。」と、いっているのです。

1節で、「主は私の羊飼い」「私は羊です」と、信仰告白した後は、すべて主がいろんなことを、それも、「主の御名のために」して下さっていて、私はといえば、主のいつくしみと恵みとを受けて、“結果、こうなる”ということばかりです。

主は伏させ、主は伴われ、主は生き返らせ、主は導かれ、主はともにおられ、主は守り、主は食事をととのえ、主は油をそそがれます。

私は、その結果、乏しいことがないし、わざわいを恐れなくていいし、慰められるし、杯はあふれているし、いつくしみと恵みとが追ってくるのです。

以上のことは、すべて結果であって、私が何かしたということは、何一つありません。

私がすることは、二つだけです。

一つは、1節にあるように、主なる神に対して、“羊であること”“羊であることを認めること”です。

もう一つは、最後の6節にあるように、私は、いつまでも、とこしえに、“主の家に住むこと”です。

“羊であることを認めること”“主の家に住むこと”この二つです。

ですから、この詩篇23篇は、主がこうこうされ、その結果、私はこうなっていますよ、ということで満ちていますから、私たちのなすべき行動をとらえて、この詩を簡潔にまとめてみますと、たった2行の詩になるのです。

「主は私の羊飼い。

私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」

私は、いつまでも、とこしえに、天国の先々まで、主の家に住みます。

この詩篇23篇は、いわば、私個人に対して、主がなして下さった良きことを、一つ一つ数えながら、美しくうたい上げた、信仰告白の、賛美の詩であるのです。

もう少し詳しく、中身を見ていきましょう。

「ダビデの賛歌」とありますが、ダビデも、かつては羊飼いでした。もう少し言うならば、旧約聖書の主(おも)だった人たち、アブラハムも、ヤコブも、モーセ、アモスといった人たちも、羊飼いでした。

この23篇の詩は、羊飼いのことや羊のことを知りつくしている、ダビデ自らの体験と重ねて、うたっています。

まず、「主は私の羊飼いです」とうたい出しましたが、主なる神が、私の羊飼いでなかったとしたら、どうだったでしょうか。

そういう牧者に飼われていた、悲惨な羊たちのようすが、「エゼキエル書」に記されています。

「神である主は、こう仰せられる。

ああ、自分を肥やしている牧者たち。

牧者は、羊を養わなければならないのではないか。あなたがたは、脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって、力ずくと暴力で、彼らを支配した。彼らは、牧者がいないので、散らされ、あらゆる野の獣のえじきとなり、散らされてしまった。

わたしの羊は、すべての山々や、すべての高い丘をさまよい、わたしの羊は、地の全面に散らされた。尋ねる者もなく、捜す者もない。わたしの羊は、かすめ奪われ、牧者がいないため、あらゆる野の獣のえじきとなっている。

それなのに、わたしの牧者たちは、わたしの羊を捜し求めず、かえって、牧者たちは自分自身を養い、わたしの羊を養わない。」

悲惨そのものでは、ないでしょうか。

しかし、幸いなるかな。私の羊飼いである、主なる神は、良い牧者です。

主は、自分の羊を、その名で呼んで、連れ出します。主は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると、羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。

追いたてるのでは、ありません。羊飼いは、羊の先頭に立って、羊を導いていくのです。

羊は、良い羊飼いの声を、聞き分けます。又、羊飼いは、羊のことを、よく知っています。そして、羊たちは、羊飼について行きます。

1節後半、「私は、乏しいことはありません。」とあります。どのように、乏しくないのでしょうか。

もし、私たちが、次のように考えているのだとしたら、それは、まちがいです。

すなわち、私たちが、物質面で繁栄しているなら、それは、神さまが、私たちの生活を祝福しておられるしるしである。 — と思うまちがいです。

次のような、聖書のことばを思い出します。ラオデキヤ教会の教会員に語られた、主イエス・キリストのことばです。

「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もない、と言って、実は、自分がみじめで、衰れで、貧しくて、目が見えなくて、裸の者であることを知らない。」

富める青年に対しては、

「あなたには、欠けたことが一つあります！」

と言われました。

ここで、「私は、乏しいことはありません。」といった時、物質的な貧しさを指していたのでは、ありません。

どのように乏しくないのかは、つづく、2節から6節までの中で、一つずつ数えあげていきます。

2節「主は私を緑の牧場に伏させ、憩いの水のほとりに伴われます。」

主イエス・キリストは、言われました。

「私は門です。だれでも、わたしを通してはいるなら、救われます。また、安らかに出入りし、牧草を見つけます。」

聖書の舞台となっている、パレスチナの野原は、決して豊かな牧草地ではありません。岩だらけで、まるで砂漠に近い状態です。水を飲ませることも、草を与えることも大へんな環境です。

羊のための緑の牧場も、水のほども、偶然にできるものではありません。えさ場としての緑の牧場は、大へんな労力と時間、管理、そして、土地利用の技術の結果として、できてきたものです。

荒れた岩地を切り開き、根っこや切り株などを引き抜き、耕し、整地し、水を通し、そして、羊のえさとなる牧草が生育するように、念入りに、手入れを、毎年毎年してきている結果なのです。自然に、勝手に、えさとなる草が与えられるわけではないのです。

水も同じです。どこにも、自然の水があるわけでは、ありません。羊飼いたちは、自分たちの生活のため、そして、羊たちのために、井戸を掘り、水を確保するのです。

牧草にしても、水にしても、すべてには、注意深い羊飼いの、途方もないほどの労苦や、技術・時間が使われているのです。

羊たちが、褐色の、不毛の丘が続くような環境の中で、緑の牧場やいこいの水にありついているとすれば、そこには、羊飼いの、途方もない量の仕事があった、ということなのです。

「緑の牧場に伏させ」

「伏させ」と、ひと言で書かれていますが、羊という動物は、神経が細やかな動物なので、次の四つのことが満たされていないと、“横になって伏させる”ということは、ほとんど不可能なのだそうです。これは、羊飼いを経験したことのある方が、書いておられることです。

一つは、恐れが、全然ない状況でない限り、羊は横になろうとはしません。

二つには、仲間のだれとも、マサツがない状態でないと、横になりません。

三つめは、ハエや寄生虫などに苦しめられていると、横になりません。

四つめは、飢えていない状態でないと、横になりません。

「恐れ」「緊張」「いらだち」「飢え」といった、四つの事柄から解放されている、というはっきりした意識がなければ、「伏して、憩う」ということは、ないのです。

この、詩篇23篇の羊は、これらすべてから、解放されているということなのです。

3節「主は私のたましいを生き返らせ」とあります。

よい牧者である、主イエス・キリストは言われました。

「私が来たのは、羊がいのちを得、また、それを豊かに持つためです。」

霊的に死んでいた私たちの魂も、主イエス・キリストによって、死から生命に移された、という体験をいたしました。

「主のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで、わきまえのない者を賢くする。主の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、主の仰せはきよくて、人の目を明るくする。」

主イエス・キリストによって、又、そのみことばである聖書によって、たましいを生き返らせ、わきまえのない者も賢くされ、喜びにあふれた者とされ、明るく輝く者とされました。

「御名のために、私を義の道に導かれます。」

よい牧者である、主イエス・キリストのことば

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり、父のみもとに来ることはありません。」

そして、
「いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」とも、言われました。

滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのですが、“羊であること”を信仰告白した私を、義の道、天国につながる神への道に、導いて下さいました。それも、主ご自身の御名の栄光をあらわすために、羊のようにさまよっていた者を、たましいの牧者である方が、導いて下さったのでした。
心から、主の御名を、たたえたいと思います。

4節「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れません。」

3節までは、「主」と、三人称で呼んでいた主なる神が、4節・5節では、「あなた」と、二人称になっています。

これまでは、丘や山のふもとにある、柵に囲まれた牧場(まきば)で、放牧されていました。そして、夕方になると、おりの中に集められ、眠っていました。

しかし、夏になると、羊飼いは、羊たちを連れ出し、山の中の道を通して、夏の放牧場のある高地へと、導いていきます。有能な羊飼いは、夏の間、遠い、夏の放牧場に群れを連れて行こう、と努めます。これは、しばしば、長い旅となります。

羊は、ゆっくりと移動し、道々、新鮮な、おいしい草を食べながら、次第に、山々への道を登りつめて行きます。そして、少しずつ移動して、夏も終わりに近くなるころには、高山地帯の牧草地にまで、登ります。

この時期には、羊は、昼も夜も、羊飼いの自身の注目の下にあります。羊飼いと羊は、親密なつながりが、出来ていきます。

この節から、「あなた」という二人称で表現されているのは、羊と羊飼いが、これまで以上に親しい、親密な関係にあるからである、と言えると思います。

荒れた山々、深い谷、流れのはやい川、そして、高地の牧草地。

昔のパレスチナは、野獣に満ちていたそうです。

パレスチナには、深い谷があって、猛獣がそこに潜み、しばしば、羊を襲ったことが、伝えられています。

この詩の作者であるダビデ王も、かつて、羊飼いであったといいましたが、次のように言っています。
「しもべは、父のために、羊を飼っています。獅子や熊が来て、群れの羊を取って行くと、私はそのあとを追って出て、それを殺し、その口から羊を救い出します。それが私に襲いかかるときは、そのひげをつかんで打ち殺しています。このしもべは、獅子でも、熊でも打ち殺しました。」

羊は、弱く、他の獣に対して自己防衛力を持たず、迷いやすい動物だと言われています。

神との関係において、人間も、そのような存在であると言えます。

羊には、自己防衛の手段が、まったくありません。無力で、臆病で、弱々しい、ただ逃げることしかできない動物なのです。

羊にとっては、羊飼いが、野にいろのを見ることほど、心安まり、安心させられることはないのです。羊飼いが、そこにいることで、羊たちは、何よりも、安心し、安らぎを感じるのです。

羊は、身を横たえて、眠ります。羊は、また、目をさまします。主が、ささえてくださるからです。

平安のうちに、私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。

主よ。あなただけが、私を安らかに、住ませて下さいます。

人は誰しも、災いを恐れ、平安を願うものです。災難をまぬがれたいために信心する、という人もあるでしょう。しかし、聖書には、「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れません。」とあります。

もしも、信仰をもてば、災いにあわないと思っている人がいたとしたら、災いにあった時、その人の信仰は、ガタガタと崩れてしまいます。

信仰を持つ者が、なぜ、災いを恐れないのか。それは、「神が、私とともにおられるからです。」と、語っているのです。

私たちの失敗のほとんどは、“恐れ”から起こってきます。

聖書の中にも、恐れて、失敗した多くの例が記されています。しかし、又一方で、主なる神を信じて、恐れが取り除かれて勝利していった多くの例も、記されているのです。

「恐れるな。わたしは、あなたとともにいる。たじろぐな。わたしが、あなたの神だから。わたしは、あなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、『恐れるな。わたしが、あなたを助ける。』と、言っているのだから。」

なぜ、「私はわざわざいを恐れないのか。」それは、「あなたが、私とともにおられるから」です。

「主は私の味方。私は恐れない。主は、私を助けてくださる私の味方。主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。」

「恐れない」ということは、すばらしい信仰告白であるのです。

「恐れるな。わたしがあなたを贖(あがな)ったのだ。あなたはわたしのもの。わたしが、あなたの神、主。あなたの救い主であるからだ。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしは、あなたを愛している。

恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」

と、主は言われています。恐れる必要はないのです。

「あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」

〈むち〉は、先に鉄の金具がついているこん棒で、獅子や狼、熊、コヨーテ、野犬のような、羊を略奪に来る動物を追ひ払うために用いられました。

〈杖〉の方は、羊の世話をするために使われる道具です。

羊飼いは、杖を使って、羊を新しい道に導き、あるいは、危険な、難儀な道をも、無事に通らせて行くのです。羊をたたくために、杖が使われるのではありません。むしろ、細長い棒の先で、やさしく羊の脇腹にさわって、その押す力で、羊を、行かせようとしている方向に向けます。こうして、羊は、正しい道を安心して進んでいくのです。

5節「私の敵の前で、あなたは私のために、食事をととのえて下さいます。」

まわりには、遠まきに、獅子や狼や、コヨーテ・野犬・熊さえひそんでいるような高地の放牧地で、恐れることなく、平安の内に、おいしく食事をする事ができるのです。

主が守っていてくださるので、悪いものは、彼に触れることが出来ないのです。

次には、「私の頭に、油をそそいで下さいます。私の杯は、あふれています。」

主人が、客の〈頭に油をそそぐ〉ということは、パレスチナの習慣であり、この「油」は、香油・香水で、喜び

を表現するものでした。ベタニヤのマリヤが、主イエス・キリストの頭に、純粋で、非常に高価なナルド油を注いだ場面を、思い出す人も多いでしょう。

〈杯〉は、主人から客に回されるもので、歓迎と親密さを表します。

5節を、これまでの羊の話から離れて、突然、私たちが客としてもてなして下さる「主人としての主なる神」をうたっている、ととれますが、これまで通り、「羊飼いと羊の話」だとして考えますと、この「油」は、オリーブ油です。

夏に多く発生して、羊を苦しめる、ハエやカイセン・かさぶたなどのできものや、寄生虫を防いだり、治療したりするために、硫黄と香料をまぜたオリーブ油が、効果的です。それを、羊は、鼻や頭などにぬってもらうのです。

このようにして、敵がとり囲んでいる中での食事を、心から楽しむことが出来、羊の心は、喜びにあふれているのです。

私たちにあてはめれば、
「死の陰の谷」というのは、この「世界」
「敵」というのは、「悪魔」
「食事」は、「神のみことば」
「油」は、「聖霊」
「杯」は、私たちの「人生」そのもの
—— ということになると思います。

「あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。」

私たちも、「杯があふれている」というような、同じ体験をしているのでは、ないでしょうか。

6節 「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。」

やがて、夏がすぎ、あらしと雨とみぞれの秋がやってくると、羊たちは山を下って、長い、厳しい冬を迎えるために、ふもとの、本牧場にもどって来ます。

ふもとの本牧場であれ、高地の放牧場であれ、主が私の羊飼いであり、主が私とともにおられるので、私のいのちの日の限り、敵が私を追って来るのではなく、いつくしみと恵みとが、私を追って来ます。

「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」

私は、永遠に、天国の先々まで、神と共に住みます。
「主よ。私は、あなたのおられる家と、あなたの栄光の住まう所を愛します。」
「私は、一つのことを主に願った。私は、それを求めている。

私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」

「今、私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。私は、その幕屋(主の家)で、喜びのいけにえをささげ、歌うたい、主にほめ歌をうたおう。」

以上、この詩篇23篇には、一字も「愛」ということばは、使われていません。しかし、全篇に溢れている、

主なる神の愛を私たちは、ひしひしと感ずることができます。

「あなたが、私とともにおられますから。」このことに、無限の信頼と希望と愛が、こめられています。

このような、愛なる神を、羊飼い・人生の同行者・指導者としてもつ者は、“幸いである”と言えるのではないのでしょうか。

「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり、監督者である方のもとに帰ったのです。」

「あなたがたのうちに、羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで、捜し歩かないでしょうか。見つけたら、大喜びで、その羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。」

あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが、天にあるのです。」 アーメン。

詩篇 23篇 私の賛歌

主イエス・キリストは、私の羊飼い。

私は、乏しいことはありません。

主イエス・キリストは、私を緑の牧場に伏させ、

いこいの水のほとりに伴われます。

主イエス・キリストは、私のたましいを生き返らせ、

御名のために、私を義の道に導かれます。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、

私はわざわいを恐れません。

主イエス・キリストが、私とともにおられますから。

主イエス・キリストのむちと、主イエス・キリストの杖、

それが私の慰めです。

私の敵の前で、主イエス・キリストは、私のために

食事をととのえ、

私の頭に油をそそいでくださいます。

私の杯は、あふれています。

まことに、私のいのちの日の限り、

いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。

私は、いつまでも、

主イエス・キリストの家に住まいましょう。

ハレルヤ。